



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『黒い雨』論 : <原爆>を書くことの物語
Author(s)	夢沼, 正美
Citation	国語国文研究, 106, 25-38
Issue Date	1997-07-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94768
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_106_25-38.pdf



『黒い雨』論

—〈原爆〉を書くことの物語

蓼 沼 正 美

『黒い雨』（『新潮』・昭和四十年一月〜昭和四十一年九月）は、幾

つもの日記（「高丸矢須子の日記」、閑間重松の「被爆日記」、閑間シゲ子による「高丸矢須子病状日記」）や手記（シゲ子の「広島にて戦時下に於ける食生活」、「広島被爆軍医予備員・岩竹博の手記」、あるいは口述記録（岩竹手記中に引用された夫人の回想記録）」といった、謂わば「書きもの」から構成されたテキストである。なかでも重松の清書する「被爆日記」は、テキスト全体の三分の二近くを占めており、他にも彼が清書をする「高丸矢須子の日記」や「高丸矢須子病状日記」を含めて考えると、このテキストは登場人物たちの書く行為、わけでも重松の清書（書く）行為に、我々読者がひたすら付き合わされる物語である、と言い換えてみることも出来る。

重松がまず清書に関わるのは、「高丸矢須子の日記」である。その清書理由については、次のように語られている。

いづれにしても重松は、矢須子のこの日記を筆耕して仲人に送る

必要があった。

（第一章）

重松の姪、高丸矢須子は、非被爆者であつたにも拘らず、小畠村の人たちから原爆病患者であると噂を立てられ、数年来縁遠くなつてしまつていた。そんななかで「勿体ないほど喜ばしい縁談話を持ちあが」（第一章・以下同じ）り、重松は「今度こそ原爆病の噂が話がお流れにならないように警戒して、然るべき医師に矢須子の健康診断証明書を書いてもらつて仲人に郵送した」のである。しかしながら却つてそれが相手に不安をもたせたのか、「仲人は矢須子の健康について、小畠村のどこかの家へ聞き合わせに來たと見え、原爆投下の日から小畠村に帰るまでの広島に於ける矢須子の足どりを知りたいと手紙で云つて來た。」それに対し重松は、矢須子がつけていた当時の日記を清書し、仲人へ送ることで、彼女に対する噂が事実無根であることを明らかにし、自分たちの「再起をはか」り、「突破

口を見つけ」ようにするのであった。

しかし重松は、それだけでは満足しなかった。

「おいシゲ子、わしの被爆日記を出してくれ。おい、シゲ子、お前の筆筒にお前が蔵^{くら}っておいてくれたろう。あれを結婚の世話人に見せてやるんじや。わしの被爆日記を出してくれ。」

(第二章)

妻のシゲ子から「世話人のひとは、矢須子さんの日記を見せればいいでしょう」(第二章・以下同じ)と窘められながらも、重松は「だから、この被爆日記は、矢須子の日記の附録編じやよ」と言つて、矢須子が非被爆者であることを傍証するテキストとして、「蔵つて」あつた「被爆日記」の清書を始めるのである。

もつとも重松には、それ以前から「被爆日記」を清書しなければならない理由が既にあつた。

「この日記は、どうせ近いうちに清書しなければならん。小学校の図書館の資料室へ、これを寄附することにしたからな。寄附する前に、結婚の世話人にも見せてやる。」

(第二章)

つまり「結婚の世話人にも見せてやる」ための清書行為は、重松が自身の「被爆日記」を「矢須子の日記の附録編じやよ」と言つてゐるのと同じ意味で、「附録編」であつたのだ。

さらに重松が清書をするもう一つのテキストが、「高丸矢須子病状日記」である。確かに矢須子は原爆投下の際、広島から離れた古江町にいて被爆は免れたわけだが、実はそこから広島へ戻る途中で、所謂「黒い雨」に打たれてしまい、その結果五年もたつた後で突如発病してしまふのである。重松は、矢須子の「今後の処置について」(第十六章・以下同じ)知り合いの医師に相談を持ち掛け、その際看病にあたつてゐたシゲ子の書いた病状日記を、「罫用紙に浄書して」持参するのである。

そもそもこうした「日記」という表現形式自体、他人の眼に触れないことを前提とした書き物であるのだが、この物語の場合、矢須子の仲人や小学校の図書館の利用者という読み手を想定することによつて、我々読者に開かれることになる。この回路がテキストを書く(清書する)時間、そして読む時間を様々に重層化し、複雑な時間構造を作り出していると言える。

『黒い雨』を論じようとする時、このようなことは既にわかりきつたことであるが、それを敢えてくたたくと辿つてみたのは、始めに重松の清書(書く)行為を整理しておきたかつたからである。

さて、こうした清書というエクリチュールについて私たちは、重松による「矢須子の日記」のそれを、語り手が「昭和二十年八月五日以降、数日間の日記文を重松はそのまま書き写した」(第一章)と示しているように、対象となるテキストを「そのまま書き写」すと断ることで、もとのテキストと重松の手を経たテキストとの同一性を主張したものと捉えることになる。その意味では、重松は謂わば

透明な〈写し手〉であることになるわけだが、彼の清書行為は始めからそれを裏切る。

八月五日――

富士田工場長に明日の欠勤届を提出し、家に帰って荷物疎開の支度をする。内容は、……〈中略〉……。以上を菰で梱包し、私の肩にかけて行く鞆に米三合、当日日記、万年筆、印鑑、赤チンキ、三角巾を入れる。（疎開荷物は、終戦後二年目に小畠村へ梱包のまま返送してもらった――重松後日記）

（第一章）

重松が「矢須子の日記」を清書する理由は、先にも述べた通り、「原爆投下の日から小畠村に帰るまでの広島に於ける矢須子の足どり」を「仲人に示すことで、彼女が非被爆者であることを理解してもらうためであった。そのような重松の意識によって清書され始めた「矢須子の日記」であるのだが、ではそこに括弧書きで書き添えられた「重松後日記」とは、一体何であるのか。もともと「後日記」という添え書き自体、重松にとっては決して特別なものではなかったようだ。やはり重松が清書をした彼の「被爆日記」の中にも、同じように「後日記」が幾つも書き残してある。その場合の「後日」を、ある統一された一定の時間とにわかに決めてしまうことは難しいのだが、ここの「後日記」は、清書の対象となっているテキストが他人の日記であることを考えると、過去において重松が書き添えていたとは考えにくい。おそらくそれは、この重松の清書行為の過程

で付記されたものと言つてよいだろう。それならば、「そのまま書き写」すという清書行為を変形させてまで書き添えられたこの「後日記」は、当然清書の目的と何らかの関わりを持つているはずである。ところがここで、そのような特別な意味を見いだすことは出来そうにない。「後日記」の内容から言えば、この物語全体の語り手のコメントでも差し支えないのだが、語り手自体は頭在化出来ないため、重松のコメントとして処理したのかもしれない。それがかえつて重松の清書行為のあり方を物語つてしまったと言える。つまり重松は、たとえそれが清書というエクリチュールであるとしても、単なる透明な〈写し手〉ではない、謂わば主体的に書かれたものに関わり、そこから新たなヴァリアントを創り出していく、そんな書き手として設定されているのである。

そういう視点から今度は重松が清書する彼自身の「被爆日記」を考えてみる時、さしあたり問題となるのは、それが内包する時間的な差異である。

重松の「被爆日記」は、原爆の投下された昭和二十年八月六日から八月十五日の終戦まで、彼が体験した出来事をまとめたテキストであり、当然その日記性として、それぞれの日付と天候から書き始められている。我々はそうした記述によって、「被爆日記」内の時間と重松がそれを執筆している時間（清書の時間ではない）とを、つい同時進行なものと思ひ込んでしまうのだが、重松は「被爆日記」の冒頭を次のように書き始めている。

――昭和二十年九月、避難先なる広島県安佐郡古市町の借家の

一室にて閑間重松これを記す。「被爆日記」と題すなり。

(第二章)

しかも彼は、日頃から独特の記述法により、日記を書き残していたのである。

矢須子の日記のつけかたは、四日間か五日間ぐらい簡単に五行か六行で片づけて、五日目か六日目ぐらいのところで、数日間の出来事をまとめて詳しく書き記すやりかたである。これは重松自身がずっと以前から実行していた方式で、重松が教えてやったから矢須子が踏襲したものである。帰りが遅くて眠くてならない晩は、簡単に片づけることにして置くところからこの着想を得た。重松自称の「緩急式」という日記形式である。

(第一章)

おそらく「被爆日記」は、この「緩急式」によって書かれた「日記」を、正確に言えばその中でも「数日間の出来事をまとめて詳しく書き記」した記述を、プレテクストとしていた。しかしそれはまた、「五行か六行で片づけ」られたそれぞれ当日の「簡単」な「日記」をプレテクストとしていた（「被爆日記」から見れば、プレプレテクスト）わけで、しかも私たちはそれを、重松の清書を通して読むことになるのであるから、そこには三重にも四重にも彼の書く行為が介在していると言える。もちろん『黒い雨』というテクストにおいて、具体的なプレテクストが明らかにされているわけではないし、

ただ清書された「被爆日記」が提示されているだけであるから、それぞれのテクスト関連において、重松の書く行為がどのように情報を操作していたのか、あるいはしていなかったのかを明らかにすることは、ほとんど不可能なことである。しかしこうした重松のエクリチュールのあり様こそが、他ならぬ彼の書くことへの自覚を物語っていると言ってみることは出来るであらう。それは、先に指摘しておいた「矢須子の日記」に対する重松の清書のあり方を考え併せるならば、まさに書くことのシニフィアン、つまり書く行為そのものや書く意識の運動についての、重松の自覚であったと言える。だからそのことが、自身の「被爆日記」を清書する過程において、書かれた内容と対象との乖離を問題にしながらも、一方では書くことに對する自分の姿勢を語ってしまうことになるのである。

「おい、今日はどつさり清書したで。ムクリコクリの雲で、避難者が東練兵場でこつた返すところまで清書した。しかし、自分で見たことの千分の一も、本当のことが書けとらん。文章というのは難いもんじゃ」

「それは、あんたの書く文章が、何とかイズムとかいうのになんからでしょうが」

「イズムというのじゃないよ。わしのは描写の上から云うて、悪写実という文章じゃ。しかし、事実は事実じゃ。——おい、その鰯は泥をよく吐かせたんか」

(第四章)

「自分で見たことの千分の一も、本当のことが書けとらん。文章というものは難しいもんじゃ」というのは、確かに書くことのシニファイエ、すなわちその内容を問題とした謂いである。しかしここでもう一度、重松が「被爆日記」を清書するそもその理由を思い出してみれば、それは「小学校の図書館の資料室へ、これを寄附する」ためであった。しかもそれに続けて重松は、「この被爆日記は、図書室へ納めるわしのヒストリーじゃ」(第二章)と語っている。さらに、「被爆日記」の清書をペン(インキ)で始めた重松に対し、それでは保存性に欠けるため、毛筆(墨)による清書を妻のシゲ子が進言した場面でも同様に、「あの、あなたの被爆日記は、図書室へ寄附して、末ながく保存するのでしょうか。そうなんでしょうか」／「そうだよ、校長に頼まれたんでな。あれは、わしのヒストリーじゃ」(第三章)と答えている。つまり「被爆日記」という書きものは、「図書館」という公の場で様々な読者の眼に触れ、なおかつ「わしのヒストリー」という点では、まさに自分の全存在と等価なテキストと言える。それがいま、「自分で見たことの千分の一も、本当のことが書けとらん」(傍点寥沼)としたら、果たしてそれでもその清書を続けて行くであろうか。逆にその時に認識された「文章」というものは難しいもんじゃ」という意識は、少しでも「自分で見た」「本当のこと」とに近づこうとする意欲を生み出してしまはずである。だから重松が「わしのは描写の上から云うて、悪写真という文章じゃ。」「しかし、事実は事実じゃ。」と言う時、それはもちろん「悪写真」の文体がもたらす息苦しさを回避するよりも、事実を伝えることの方に重要性を見い出だした主張のわけだが、それ以上に清書を続ける中

で、新たに「自分で見た」「本当のこと」が書き足されることを暗示しながら、「しかし、事実は事実じゃ」と自身のエクリチュールに言及して見せた場面とも言えるのではないか。

ところで、私はこれまで「エクリチュール」という、その語自体が多様な意味を担うことで、まさにエクリチュール的となったこの批評の用語を、取り敢えず断りのないまま使ってきたわけだが、それについて改めて説明を加えておかなければならない。

私がこの用語を借りて言いたかったのは、テキスト解釈において抑圧されてきた「書くこと」の側面である。テキスト生産の過程では、必ず意識されていたはずのこの「書くこと」は、私たちのテキスト解釈がもつばらその内容についての視点から行われることで、むしろ透明化されてきてしまった。しかしたとえばこれまで見てきたように、清書された「日記」にしろ、幾つもの書く行為を経て現前化された「被爆日記」にしろ、重松の書く意識がそれらのテキストを創り出しているのである。ならばそのように生産されたテキストに対し、いったん外在化されてしまった「書くこと」をいま一度テキストに還元してみることで、改めて見えてくるテキストの姿があるのではないか。私はその可能性を引き出してくれる行為を、あるいはその結果としての書かれたものを、ここでは「エクリチュール」と呼んでみたいのである。

さて、重松によって「被爆日記」と名付けられたその「書きもの」だが、たとえばそれに対し、「世間には日記マニアと呼ばれる人間が

かなり居て、これらの記録マニアは長年にわたって実に根気よく、たんねんに日記を書きつづけているものであるが、しかしその人たちでも、重松のマネをしてこれだけの分量を連日にわたって書きこなすという芸当は、オイソレとできるものではあるまい。」と、その「常識をはるかに凌駕した破天荒な分量」に疑義を唱える意見がないわけではない。しかし「被爆日記」は、所謂日記ではない。確かに日付や天候といった日記性は備えてはいるものの、あくまで「緩急式」で書かれた「日記」をプレテキストとし、それとの時間的な隔たりを持って創られた「書きもの」なのである。とは言え、その「日記」自体が「常識をはるかに凌駕した破天荒な分量」であって、「被爆日記」はそれに多少の筆を加えただけのテキストだったのかもしれない。あるいはその逆。しかしそれを確かめてみることは出来ないであって、むしろ問題となるのは、重松が昭和二十年八月六日から八月十五日までの出来事を書くにあたって、「日記」という枠組みを選んだということである。

重松は現在、姪の矢須子の縁談話をきっかけに「被爆日記」の清書に取り掛かったわけだが、そもそも動機は小学校の校長に頼まれ、それを図書館の資料室へ寄附することであった。ならば昭和二十年九月の時点で、「被爆日記」執筆の動機は何であったのか。小学校の校長からの依頼がその時既にあったと、一応考えてみることも出来るが、それならば逆に重松は四年九月か月もの間、その清書を引き延ばしていたことになる。それよりは校長が「被爆日記」の存在を誰か（重松自身かもしれない）から聞かされ、あるいは重松から直接それを見せてもらい、いま（昭和二十五年六月初旬）からそれ

程遠くない時に、重松に対し寄贈を依頼したと考えてみる方が、テキストの現実には近いと言えるだろう。

そうであるならば、重松にとって「被爆日記」執筆の動機と清書のそれとは、別な問題であったと言える。しかし重松は、「被爆日記」の清書目的を明らかにしながら、それが自分にとっての「ヒストリー」であることを、繰り返し主張もしている。おそらくはその「ヒストリー」を書くということが、「被爆日記」執筆の動機だったと言つてよいだろう。もつともその時に具体的な読者が想定されていた様子は伺えず、多分自分自身に語り掛けるようなつもりだったのだろう。とは言えそれは、先にも示した冒頭の表現からも明らかのように（正しくは清書された「被爆日記」の言説だが、少なくとも質的な差異はなかったと言つてよい）、公開意識（＝「資料」性）を内包はしていた。但し「ヒストリー」ということであれば、彼が日々綴っていた「日記」をこそ、そう捉えてみてもよかつたわけだが、重松は、改めて被爆から終戦までの出来事を書き起こしたテキストの方を、「わしのヒストリー」と認めたかつたのである。それについては重松が、「日記」の非公開性という前提に従っていたためとも考えられるが、彼自身あるいは彼の周囲も、あまりそのことについてのこだわりはなかった。それというのも、矢須子が縁談の仲人から健康についての疑いを掛けられた時、彼女はその疑いを晴らすために、自分が書いていた日記を重松に差し出すのである。そして重松は、それを何のためにもなく受け取り、仲人に送るため清書を始めるのである。なるほど、もはやそれしか手立てがなかつたのかもしれない。しかし一見あうんの呼吸で行なわれたこのやりとりは、たと

えそれが姪のものといえ、若い女性の日記に対する取り扱いとしては、些か無造作に過ぎる。だがそれは、逆に彼女の日記にはその程度のことしか書かれてはいなかったとも言えるのであって、では翻つて「矢須子の日記」をそのように扱う重松自身の「日記」はどうかという、何よりもまず彼の「日記」がそうであつたと考えられる。但しここで「その程度」と言つたのは、「日記」としてのブライベイトな言説の「程度」であつて、その内容についての謂ではない。要するに重松の「日記」は、どこまでそれを意識していたかわからないが、いつでも他人の眼に触れられることを許しながら書いていたテキストだつたと言えるのである。しかしそうした意識は、だからそれを資料として寄贈してみるところまでは至らなかつた。そこに書き方の問題が関わつてくる。

「緩急式」と重松が自称する彼の「日記」の書き方は、それがテキスト内に不在であるため、私たちは同じ記述方法による「矢須子の日記」から、その表現形式を推察してみるしかない。「矢須子の日記」についての引用は長くなるので差し控えるが、それを読む限り「緩急式」による「日記」は、あくまで書く側にとつて有効な方法なのであって、読み手にとつてみた場合は、決して読み易いテキストとは言えないのである。そのため重松には、自分の「日記」が他人の眼に触れられることにはためらいはないが、しかしその前に改めて読み易い形式に整理しておく必要があつた。言つてみれば重松は、その時初めて明確に読み手を意識した書き手となつたのであり、自らのエクリチュールを自覚した書き手となつたのである。そうした重松は、被爆から終戦までの出来事を整理するのに、どのような枠組み

を選んでもよかつたわけだが、「ヒストリー」性を担いなおかつ対読者への「資料」性を保証してくれる一方で、時間軸が最もしっかりしているために文脈の整理が付け易い、「日記」という枠組みを選んだのである。そして後年小学校の校長が、その寄贈を依頼していることを考えると、重松の選択は間違つてはいなかつた。しかし重松自身によつて選ばれた枠組みではあるが、反面重松の書く意識が、それを差異化しているとも言える。

僕は予定通り広島駅へ出るために、山の方へ行く人たちと斜交いに練兵場の端寄りに歩いて行つた。無論、行きずりに見る何千人、何万人とも知れない人たちの風姿様相は種々さまざまであつた。(その一部を、くどいようだが現在の僕が記憶するまま、左に書きとめる)

(第三章・傍点は蓼沼、以下同じ)

人込みのなかを分けて出る人もいた。これで可なりゆとりが出来たので、今まで黙りこんでいた乗客たちは、ぼつりぼつりとお互いに口をきくようになった。みんな今日の爆撃のことについて話し、誰しも互に連関なく自分の見聞したことしか云わなかつた。だから、みんなの話を総合しても災害の全貌は知れないが、僕は記憶するままにその話をここに書きとめる。

(第八章)

今、僕は後日のために、この場の田中君と工場長の問答を在り

のまゝに書きとめる。

(第十一章)

重松の選んだ「日記」という枠組みは、これらの引用が示すように、「記憶するまゝ」に「書きとめ」られた、あるいは「在りのまゝに書きとめ」られたテキストであることが前提とされている。もちろん厳密に言えばそのようなことは不可能だが、少なくとも枠組み自体は、そうした言説によるテキストであることを物語っている。視点を変えれば、この枠組みにおいては書き手の記憶の再現が問題なのであって、書くことそのものの意識はむしろ低下していくものと考えられている。そのため私たちの体験や心情が、虚構を伴わず「在りのまゝ」書かれていくということから、「日記」こそがその人の真実を物語るという神話が生まれることになる。

ところが重松の「被爆日記」の場合、引用に取り上げた言説によって明らかにされているのは、同じテキスト内における言説の差異である。と言うのも「日記」である以上、「記憶するまゝ」や「在りのまゝ」の言説がその枠組みを作っているわけだが、一部の記述に対してのみ敢えてそれを断っているということは、テキスト全体としてはむしろそれとは異質な、つまり重松の表現意識によって支配されていることを示している。その意味で私たちは、「被爆日記」によって「在りのまゝ」の「原爆」を読むことなど出来ないのである。そしてまた、重松の妻シゲ子が書き、重松が「浄書」をした「高丸矢須子病状日記」についても、書くという行為から見た場合、それと同じことが言えるのである。

細川先生に預けて来た日記（「高丸矢須子病状日記」・夢沼註）は、矢須子が病院の梶田医師に往診を受ける最初の日から後七日間にわたるものである。シゲ子が擲り書きで書いているのを重松が野用紙に浄書して、仮名づかいも文章も重松の好みのまゝに改めてある。

(第十六章・傍線は夢沼)

重松は原爆症を発病した矢須子について、今後の処置を相談するため、知り合いの細川医師のところへ出掛けて行く。その際矢須子の「病状表の代用」として、看病にあたっていたシゲ子が書いていた病状日記を持参するのだが、それが「擲り書き」だという理由で、重松は改めて「浄書」するのである。私たちはそれをテキストとして読むわけだが、その時には既に「仮名づかいも文章も重松の好みのまゝに改め」られているのである。謂わばここでも私たちは、シゲ子の書いた「高丸矢須子病状日記」を読んでいるのではなく、重松のエクリチュールを読んでいることになるのである。

念のために断るならば、だからそれらのテキストを、虚構のテキストとして位置付けたいわけではない。そうした内容の問題とは別に、テキスト生産に関わって働くエクリチュールへの意識、それに注目することで、『黒い雨』に内包された「書くことの物語」を明らかにしてみたいのである。

矢須子が原爆病を発病したのは、重松が「被爆日記」の清書を続けている現在、つまり昭和二十五年の七月に入ってからと推察され

る。そして私たちが初めてそれを知るのは、『黒い雨』における現在の物語からではなく、「被爆日記」を清書する重松のエクリチュールからである。重松のそれは、八月十二日の出来事に続いて二つの「後日記」を書き添えていて、そのうち二つめの方に矢須子の発病が触れられている。

（以下も後日記だが、小畠村から広島に出動した特設部隊救護班について、僕の誤聞を訂正する意味と、もう一つのことのために記したい。

〈中 略〉

以上、僕は今ではもう原爆の怖しさについて、口をつぐんでいる必要がなくなったので、保健婦たちのお灸のまじないも偽りない実状として書きとめた。焼跡を歩きまわって来た人たちの死亡率も統計的に記した。理由は、先日まで姪の矢須子の縁談が加速度的に捗りかけていたが、不意に先方の青乃から断つて来て、おまけに矢須子が原爆病の症状を現し始めたからである。

〈中 略〉

矢須子は次第に視力が弱って来て・絶えず耳鳴りがするようになったと云っている。はじめ僕は茶の間でそれを打ちあげられたとき、瞬間、茶の間そのものが消えて青空に大きなクラゲ雲が出たのを見た。はつきりそれを見た。——後日記

（第十五章）

重松は、矢須子の縁談をうまくまとめる目的で「被爆日記」の清

書が続いているわけだが、しかし彼の中で書く意識は、次第にそのことを忘れ、あたかも「被爆日記」そのものに取り憑かれたかのようにも見受けられる。そこに『黒い雨』というテキストの構成上の破綻が言われても来たのだが、重松にとって「姪の結婚」の問題は決して背景化してしまっただけではなかった。事実六月三十日に縁談の相手から矢須子に宛てて速達が届いた時にも、「この手紙、矢須子の机の上に載せて置け。どんなことを云ってよこしておるか知らんが、手紙をよこすからには本人の気が動いておる証拠だな。万事、この調子でなくてはいいかん」（第九章・以下同じ）と機嫌をよくし、「風呂の下を焚くのはそのままにして」、その日の「燈籠ながしも見に行かないで」清書を続けるのである。それは全く、「姪の結婚」のためなのである。

そういう重松にとって、矢須子から原爆病の発症を打ち明けられた時の衝撃は、「瞬間、茶の間そのものが消えて青空に大きなクラゲ雲が出たのを見た。はつきりそれを見た。」と書いてみたところで、決して大袈裟な表現ではなかったはずだ。しかしそれとは別に矢須子の発病を明らかにする重松のエクリチュールには、はつきりと彼の書く意識が自覚されていたと言える。それと言うのもこの「後日記」を書くことについて重松は、「小畠村から広島に出動した特設部隊救護班について、僕の誤聞を訂正する意味と、もう一つのことのために記したい。」（傍点は夢沼）と断っている。この「もう一つのこと」というのが、矢須子の発病についてというわけだ。このように現在の自分にとって最も衝撃的な出来事を書くとする時に、重松はわざわざそれを後回しにして、しかもその具体的な内容は触れ

ずにおく。そうしておいて書き始められた「特設部隊救護班について」の記述は、テキスト内の他の「後日記」と比べ意識的と思えるほどの長さとなっている。そのため「もう一つのこと」の方は宙吊りの状態に置かれてしまい、それだけ引き延ばされた後で、^{註4}実は矢須子が原爆病を発病し……と明らかにして見せるのである。しかもその時ですら、「先日まで姪の矢須子の縁談が加速度的に捗りかけていたが、不意に先方の青乃から断つて来て、おまけに矢須子が原爆病の症状を現し始めた」（傍点は夢沼と、書くことを引き延ばしている）のである。

この「後日記」の執筆は、矢須子の発病という現在の出来事が示されていることから、他のそれと違って、清書行為の時間に一致していることが特定出来る。その点で、ここでの重松の書く意識はプレテキストを持たず、ために清書の場合と比べ、比較的自由にその意識を発揮出来る。それがこのようなエクリチュールとなつて、「被爆日記」の中の物語性を垣間見させてくれるのである。

また重松にとって矢須子の発病は、「被爆日記」清書の目的の一つ失ったことにもなる。とは言え今度は自身の「ヒストリー」としての、また被爆体験の「資料」としての清書が明確に自覚されるわけで、換言すれば、それはもともとこのテキストに内包されていた読者を、改めて意識し直すということでもある。さらに言えば、八月六日から十二日までの清書をおえた重松にとって、残りは終戦までの三日である。「黒い雨」の語り手も、重松によつて矢須子の原爆病が明らかにされた直後、「被爆日記」は終戦当日の八月十五日附で終わっている。あと三日ぶん清書すればおしまいだ」（第十六章）と、

殊更読者に促してもいる。しかもこの語り手の言説は、ほとんど重松のそれであり、その意味では「被爆日記」の書き手である重松もその読者も、ともにここでテキストの終わりを意識することになるのである。

以上のような意識を持つて重松は、再び「被爆日記」の清書に取り掛かるうとするのだが、これまでのように集中することは出来ない。「矢須子の病状が気懸りで、こまごました筆先の仕事にかまつていられなくなった」（第十六章）ため、ひと月ほど清書は中断される。しかしその間の『黒い雨』の物語内容は、矢須子の病状の急速な悪化を物語るだけで、しかもそれは「高丸矢須子病状日記」を通して、間接的に伝達されるに過ぎない。むしろここでの時間を見かけ上埋めているのは、細川医院の院長が、矢須子の闘病の参考にと供してくれた「広島被爆軍医予備員・岩竹博の手記」と、それに含まれた妻の回想記録である。これは、それだけで別のストーリーラインを作っていると言えるほどの内容であるが、「シゲ子は一色病院へ矢須子を見舞いに出かけるとき、この手記を院長先生に治療の参考にしてもらおうと云つて持つて行つた」（第十九章・以下同じ）というだけでしか、物語内容との関わりはない。結局物語は、「そうだ、あと三日だ。筆記を急がねばならぬ」という重松に促され、「被爆日記」の清書が再開されるのである。こうした『黒い雨』の物語内容の停滞に比して、重松の書く行為の方はより確かな自覚を持っている、残つた三日間の清書に向かうのである。それが最もよく表れているのが、「被爆日記」の末尾に近い八月十五日、終戦の日の玉音放送の場面で

ある。

放送はもう始まっていたが、裏庭に聞こえて来るのは跡切れ跡切れの低い言葉であつた。僕はその言葉の意味を辿ろうとする代りに、用水溝に沿うて行つたり来たりして、ちよつとまた立ちどまつたりした。この溝は両側の縁が深さ六尺ほどの手堅い石崖づくりになって、溝の底もすっかり石だたみで平らになっている。流れは浅いが、ぼさなど一つもなくて、透き徹つた水だから清冽な感じである。

「こんな綺麗な流れが、ここにあつたのか」

僕は気がついた。その流れのなかを鰻の子が行列をつくつて、いそいそと遡っている。無数の小さな鰻の子の群である。見ていて実にめざましい。メソツコという鰻の子よりまだ小さくて、僕の田舎でピリコまたはタタンバリという体長三寸か四寸ぐらいの幼生である。

「やあ、のぼるのぼる。水の匂がするようだ」

後から後から引きつづき、数限りなくのぼっていた。

(第二十章)

重松は「怖いもの見たさの反対」(第二十章・以下同じ)の感情から、この「重大放送の時間」が来るとラジオのある食堂には行かず、「階段を駆け降りて、咄嗟に非常口から裏庭に」出てしまう。そして「跡切れ跡切れ」に聞こえてくる「恐るべき重大事」については、意識的に解釈回路を閉ざし、代わりに今まで自分の周りにあつて気づ

かなかつた自然——用水溝の「清冽な」水の流れと、その流れの中を遡る無数の「ピリコ」の群れを発見し、これまでの重松には似つかわしくないほどの昂揚を覚えるのである。その時の重松にとつてこれらの自然は、憔悴きつた自己の心身を癒してくれるのに十分な風景だつたと言えるだろう。そうした救済や癒しのイメージは、ひとり重松の個人的な出来事であることを離れ、「被爆日記」そして『黒い雨』という原爆文学のテクストを解釈するひとつのコードとして機能することになる。

だからだろう。この場面について論じられる場合、たとえば「なんと美しい場面だろう。原子爆弾という超異常な事件を味わされた直後長い戦争の時期に終止符が打たれた時の象徴的情景である。

この潤いある自然の復活は、主人公の暖かく潤いのある人間らしい生活のよみがえりでもあつた」という解釈がなされてきた。なるほど確かに八月十五日の重松は、そのようなイメージを抱いていたのかも知れないし、だから「日記」にもそう書いた、あるいは終戦から数週間を経て書いた「被爆日記」にそう書いた。そのようにいったんは考えてみることも出来る。しかしだからと言って、それをそのまま現在の「被爆日記」にあてはめてしまうことは、最も整理のつけ易い、但しこの上なくお手軽な解釈と言えるのではない。

何故なら「日記」であれ、終戦後まもなく書かれた「被爆日記」であれ、それを書いた時の重松は自身も被爆の体験者として原爆の酸鼻な光景の中を生きてきたわけではあるが、一方では彼にしろ妻のシゲ子にしろ原爆病らしい症状が現れていたわけではなく、もちろん姪の矢須子も健康であつた。それだけにたとえ原爆がどんなに

凄惨な出来事として実感され、それを「悪写実」というエクリチュールによって描き出したとしても、丁度重松が描く被爆者たちの惨たらしい身体的な姿と彼自身のそれとの落差が明らかにしてしまうように、重松にとってはこの出来事を、自分と世界とが今後抱えていかなければならない問題として引き受けるまでには至らなかったのではないか。つまり重松にとって原爆は、所詮どこかで逃げ道を持った、言い換えれば日常性への回復が可能な出来事として理解されていた、あるいはそう理解したかったのではないか。そうした意識が結局は重松を、へ自然による救済あるいは癒し」というマスターナラティブに回収させ、眼前の自然を救済や癒し、さらには新たな生命再生のメタファーとして表出させることになったのであろう。

もちろん重松にも「被爆後二年たつて、もう大丈夫だと思うようになった頃から」(第二十章)原爆症が現れ始め、その点では彼自身そのようなマスターナラティブへの疑念を抱かなかつたわけではないだろう。しかしながら重松の場合「軽症の原爆病患者」(第二章)だったわけで、その分原爆に対し決定的な認識の変化をもたらすことにはならなかった。むしろ重松にとって原爆が真の姿を現したのは、矢須子の発病によつてと言つていいだろう。重松の発病からすでに三年が経っているにも拘らず、そして何より非被爆者であつたはずの矢須子が、あの日のあの「黒い雨」によつて今さらに原爆病を発症することになるのである。しかもその病状は急速に悪化していく。「姪の結婚」という問題を抱え、やつとそこに「再起」と「突破口」を見い出した小市民のささやかな幸せが、一瞬にして崩壊していくのである。そして重松は、原爆によつてそのように崩れ去っ

ていく人間の姿を、やはり書くことを通して自覚する。それというのも重松は、矢須子が発病してからまだ自宅で療養している際に、妻のシゲ子から「病人は重松を煙たがっているようだ」(第十六章・以下同じ)と聞かされ、彼自身も「病人に窮屈な思いをさせてはいけない」と考えて、なるべく病室へ顔を出さないようにすることにした。だから重松は、「病人の症状は逐一シゲ子が話してくれた」と、矢須子に隠してシゲ子が書くことにした。「病状日記」から知るののもつぱらなのである。しかし重松が原爆に絡めとられていく矢須子の姿を本当に認めることになるのは、先にも触れた重松による「病状日記」の「浄書」をする時であらう。重松はそのエクリチュールを通して、これまで記憶の中の出来事であつた原爆について、いままさに自分が対峙しなければならない問題として認識することになったのではないか。そしてそれは、たとえ広島や長崎が再生されていく様子を眼のあたりにしていたとしても、重松の中では逆に全ての「再起」も「突破口」も全く閉ざしてしまふものとして、原爆を実感することであつた。あたかもそれは、八月六日の「クラゲ雲」(第三章・以下同じ)が「赤に、紫に、瑠璃色に、緑に色を変えながら、強烈な光を放つては、むくむくと絶えず内側から外へ剥れながら太つて行く」、その姿のように。

そういう重松にとって、いま改めてこの「清冽な」水の流れや「ピリコ」たちにまつわる自分の言説に再会した時、実はそれらのメタファーが現実の原爆に対しては何の力にもなり得ないことを自覚しなければならなかった。つまり彼のエクリチュールは、へ自然による救済あるいは癒し」というマスターナラティブに捉われていただけ

のことであり、結局その言説は原爆というものについて何一つ語ってはいなかった。そればかりか逆に、私たちが世界の終焉を抱えてしまったという現実を見事に隠蔽し、その認識をも妨げてしまっていたのである。そういう批評意識を自覚した重松にとって、また一方で彼は単なる透明な「写し手」ではなかったわけで、その点でこの場面についての扱いは極めて問題だったに違いない。方法として考えるならば、確かに清書という行為からは逸脱するにしろ、この場面を消し去ってしまうことも、あるいは巧く書き換えてしまうことも出来たはずである。しかしながら重松は、むしろそのエクリチュールにこだわってみせた。それはもちろん清書行為へのこだわりなどではなく、自分が自分の言説に対していま改めて読者としての強い批評意識を覚えたように、私たち読者にも原爆の問題が救済や癒しといった物語性に回収されてしまうことへのそれを、促したかったからに他ならない。その意味でこれらの言説は、極めて政治的であったと言える。つまり「清冽な」水の流れや「ピリコ」たちの群れによって、「暖かく潤いのある人間らしい生活のよみがえり」を表象させてしまうようなエクリチュールこそ、結局は原爆を記憶の中の出来事に閉じ込め、安易な救済や癒しを捏造してしまう。そのように虚構化された原爆へのエクリチュールを曝き、原爆が人間の、そして世界の終焉を告げ得る装置として、いつでもいまを生きているという事実への眼差しを喚起すること。その為の戦略として重松は、敢えて自身のエクリチュールをそのまま書き写してみたのである、それによってそうしたエクリチュールが、原爆を書くことにおいては全くの虚構でしかないということを、自己言及的に示して見

せたのである。

だが同時に、その戦略によって私たちが認識することになる原爆のテキストは、常に世界の終焉を自覚した虚しいものとならざるを得ない。そのことをよく示しているのが、今度は『黒い雨』の末尾、重松が「被爆日記」の「清書」を完了した翌日の描写である。

その翌日午後、重松は孵化池の様子を見に行った。毛子の成長は上々で、大きい方の養魚池の浅くなっている片隅に蓴菜が植えてあった。たぶん庄吉さんが城山の弁天池から採って来て植えたのだろう。緑色に光る楕円状の葉片が水面に点々と浮かんでいるなかに、細い花梗をもたげて暗紫色の小さな花を咲かせていた。

「今、もし、向うの山に虹が出たら奇蹟が起る。白い虹でなくて、五彩の虹が出たら矢須子の病気が治るんだ」

どうせ叶わぬことと分っているても、重松は向うの山に目を移してそう占った。

(第二十章)

この場面、語り手による自然描写は、「被爆日記」における重松のそれよりも複雑になっている。「毛子の成長」や「緑色に光る」「蓴菜」の「葉片」と比べ、「細い花梗をもたげ」た「暗紫色の小さな花」には、救済や癒しあるいは生命感のようなものは感じられない。むしろそこには死や絶望といったイメージが、メタフォリカルに表現されている。語り手がそのような自然を選び取ってくるのは、明らかに矢須子の回復の不可能性を意識してのことだが、逆にそれは語

り手自身が選び取ったもうひとつの自然、「毛子の成長」や「緑色に光る」「蓴菜」の「葉片」の持つイメージが、原爆の問題に対しては全くの虚構でしかないことの虚しさを語っているのである。また重松が、「今、もし、向うの山に虹が出たら奇蹟が起る。白い虹でなくて、五彩の虹が出たら矢須子の病気が治るんだ」と祈る時、重松とほとんど双生児とも思われるこの語り手は、彼の内面にまで立ち入って「どうせ叶わぬこと」と、その不可能性の自覚を代弁するのである。この場合矢須子の病気の回復を祈ること、それはつまり原爆への祈りのわけだが、そのことの虚しさを重松はよく知っていた。知っていてそれでもなお「向うの山に目を移してそう占」うのだが、そのように虚しさの中で紡ぎ出される言説だけが、様々なごまかしに解消されない原爆についてのテキストを作ることが出来るのである。

確かに『黒い雨』は、重松が「被爆日記」の清書をするという、謂わば原爆を書くことを通し、そのエクリチュールの虚と実を生きる物語であったと言える。しかしまた、語り手によってテキストの末尾数行で語られたことに注意を向けるならば、まさにそれはその狭間に生きることの虚しさだったわけで、その意味において『黒い雨』は、優れて原爆文学的なテキストであると言ってみることも出来るのである。

註1、平岡篤頼は、それを時間の重層性として指摘している。（「物語の氾濫」・『文体』昭和54・6）

註2、古林尚・井伏鱒二の『黒い雨』（元）（『文学的立場』12号・

昭和42・10）

註3、『黒い雨』は昭和40年1月から7月まで「姪の結婚」という題名で連載され、以降8月から「黒い雨」と改題され、翌年9月まで21回連載された。

註4、こうした語り手と重松との言説の同質性は、このテキストの特徴の一つでもある。

註5、渡辺芳紀『「黒い雨」』（『現代国語研究シリーズ11』・昭和56・

5・尚学図書）

ほかに猪野謙二『「黒い雨」について』（『国語通信』昭和47・3・筑摩書房）、涌田佑『「黒い雨」の記録性と小説性』（『現代文学』2-5・昭和53・5）、大江健三郎「揺るがぬ『黒い雨』」（『新潮』平成5・9）などが、ほぼ同じ視点から論じている。

尚、『黒い雨』に関するテキストは、新潮文庫『黒い雨』を使用した。このテキストにこだわったのは、五十二刷（平成七年五月三十日現在）という版の多さからも分かるように、それが私たちの間に最も広く流布した『黒い雨』のテキストだからである。

引用については、必要に応じ一部のルビのみ付記した。

（たでぬま まさみ・苫小牧高専助教授）